

ミステリーツアー岡山 2022



2022年6月

旅のチカラ研究所 植木圭二

妻と3泊4日のミステリーツアーに行ってきた。もちろん行先は知らされておらず、私も敢えて調べることをしなかった。今回は豪華な宿に泊まり、物知りのバスガイドのお陰で実に充実した旅になった。

第一章 ミステリーツアーが始まる

■岡山に飛ぶ

今回のミステリーツアーは羽田空港集合から始まった。私と妻は添乗員から岡山行きの航空券を受け取った。私はやっぱりと思いつつ飛行機に乗り込み岡山桃太郎空港に到着した。ツアー参加者は30人ほどで、年配のカップルが多い。

空港には地元のバスガイドが迎えに来てくれている。彼女は30代か、マスク越しに見るからだろうか若そうに見える。その彼女から「次の訪問地は言えませんが、40分くらいで着きますよ」とツアー客に伝えられる。

今回のツアーの正式名称は「東京クリスタルハート初登場の全室オーシャンビューの5つ星の宿と当社基準Sランクホテルに泊まる につぼん再発見ミステリーツアー4日間の旅」という長い名前が付いている。「につぼん再発見」と日本をひらがな表記しているのがミソらしく童心に帰れということかもしれない。そしてクリスタルハートは阪急交通社の高級路線ブランドなので、かなりの高級宿に泊まれるはずで、私はむしろ高級宿を期待して参加した。

岡山空港から最初の訪問地は倉敷市の美観地区だ。何と私と妻は1カ月前に来たばかりだ。

ここで自由昼食を兼ねた散策時間が2時間近く取られているが、散策もほどほどにして妻と昼食をどうするか相談になる。前回はこの地が発祥という「ぶっかけうどん」を食べたが、同じではつまらない。駅前まで足を延ばすと趣のある和食の店があって、岡山名物の「ばらずし」の看板が目に入る。早速暖簾をくぐって、ばらずしを注文する。これが見た目も良いが味も良く、今回の旅は上々のスタートを切ったと妻と乾杯する。

■山城

バスは次の目的地に向けて走り出す。そしてまた到着までのおおよその時間は教えてくれるものの、直前まで目的地は教えてくれない。

今回の旅は、私は出たとこ勝負の旅を楽しむために敢えて行先を調べないようにしている。個人旅行ならばそうはいかないが、団体旅行それもミステリーツアーなのだから旅行会社の思惑に乗る方が絶対に面白いはずだ。車窓から見える情報やバスガイドの発言を頼りに推理するのもまた楽しい。

私の持論で「期待と落胆、偶然と感動」というのがある。旅は期待し過ぎてその期待が外れると落胆し、逆に期待しないで偶然に出会ったものは感動が大きいというものだ。その意味では行き当たりばったりの旅が良いのかもしれないが、同じような効果をミステリーツアーがもたらししてくれる。

岡山県総社市に入り、周りは山ばかりになってくる。目的地は山の上にあるようで、狭い道なのでマイクロバスに乗り換えてようやくたどり着く。

着いたのは山城の跡だ。観光目的に整備されており、復元された城がある。

岡山と言えば桃太郎、この城はその桃太郎伝説の鬼ヶ島の城を連想させるもので「鬼ノ城（きのじょう）」と呼ばれている。私も妻も初めての場所で、こんなものがあったのかと驚きを隠せない。他のツアー参加者たちも同様の反応をしている。

ツアーのパンフレットにはこの城の写真が載っていたが、城の外壁には不思議な文様が描かれており、私にはそれが何の模様か全く分からなかった。

バスガイドの案内で山城を展望台から見た後に、城にやって来る。城は復元されたもので土塁や石垣以外は比較的新しい。それでも鬼が住んでいたかもしれないという雰囲気がある。

新しく設置された説明看板には鬼ノ城は桃太郎伝説の鬼の城だと書かれており、やはり今回のミステリーツアーは日本の昔話ゆかりの地を訪ねるといふ企画のようだ。



【鬼ノ城】

ところが説明看板を信じて鬼の城だと思っていたが、学術的にはどうも違うらしい。バスガイドが詳しく説明し始める。

663年に朝鮮半島で起きた白村江の戦いに日本は当時の友好国だった百済に加勢するために大軍を派兵して唐と新羅の連合軍と戦ったが、大敗して逃げ帰ってきた。その仕返しを恐れて造ったのがこの城で、当時はこの城山の麓まで海だったというから海上防衛の砦としては適しており、同様の城が九州と瀬戸内海沿岸に多くあるという。

この話を聞いてツアー客たちは「なーんだ」と言って落胆が隠せない。その学術調査の結果はビジターセンターに詳しく展示されている。それゆえ朝鮮文化の名残の文様が描かれている。いや鬼の文様にも見えるように描いたのかもしれない。

それにしてもバスガイドは663年という年号がさらりと出てくるのだから、よく勉強している。

■湯郷温泉

次の目的地は、今夜泊まる宿だというのが、なかなか教えてくれない。運転手も勿体をつけて運転しており、行先標識のある分岐を曲がる時にはフェイントをかける始末だ。

そしてバスは岡山県美作市の湯郷（ゆのごう）温泉に到着する。私にとっては初めての温泉地で、今宵の宿は「美春閣」という温泉街から少し外れた場所にある立派なホテルで、綺麗な庭園が特徴的だ。



【美春閣のロビーから見る庭園】

私は早速大浴場に入浴する。ナトリウム・カルシウム-塩化物泉というありふれた泉質だが、大きな内風呂が特徴的だ。その一方で露天風呂は2~3人でいっぱいになる程で、おそらく後から無理矢理に露天風呂を作ったのだろう。

夕食は豪華だ。岡山和牛のすき焼き、アワビの踊り焼きと元気が出そうな食材が並ぶ。それにも増して仲居のオバサンの元気な対応に私は注目する。ツアー客皆に配膳しながら料理と一緒に元気を配っているかのようだ。彼女は「元気だけが取り柄で、他は何も取り柄がなくて、頭はついているだけ」という言葉には私も妻も思わず吹き出してしまった。

ホテル主催の蛍鑑賞ツアーがあり、バスで温泉街近くの河原に連れて行ってってくれるというので参加する。河原にやってくると、既に浴衣姿の人たちが数十人いる。暗い川面に目を向けると蛍がたくさん飛んでいる。私は実に久しぶりに蛍を見ることになり、遠い昔の子供の頃を思い出した。実に趣ある夜の散歩になる。

何の事前情報もなく、だから期待もなく、何気なく蛍鑑賞ツアーに参加したのが良かったのだろう。これはホテルが独自に開催しているものだが、参加者にとってはミステリーツアーの一環に感じるだろう。

第二章 ミステリーツアー2日目

■岡山県で金太郎とは

翌朝、バスはホテルを出発して高速道路に入り西に向かう。湯郷温泉の隣町の勝央（しょうおう）町を通過する。

この町は金太郎の町だとバスガイドが紹介すると、車内では「エッ！」という言葉も出て、ブーイングに近い反応が起きる。もちろん神奈川県在住の私も妻もそのブーイングに加わる。何しろ、金太郎は神奈川県の足柄に生まれた坂田金時の幼名で実在の人物で、私も妻も足柄に行って見て来た。するとバスガイドは少し慌てて「勝央町は金太郎が亡くなった場所で、九州遠征の途中で病死した町です」と言葉を付け加える。

金太郎は956年に誕生し、足柄山で過ごした。足柄峠にやってきた源頼光と出会い、その力量を認められて家来になり坂田金時と改名し、頼光四天王の一人となった。丹波の国の酒呑童子が都に現れては悪いことをしていたので、源頼光と四天王たちが退治した。そして坂田金時は九州の賊を征伐するため九州に向かう途中、ここ勝央町で熱病にかかり55才で亡くなった。

勝央町と金太郎は無関係ではないにしても、強引さは否めない。しかし昔話のヒーローの亡くなった場所が特定されているという点では極めて珍しい。

バスは津山市内を走っている。バスガイドは岡山県がB級グルメの祭典B-1グランプリで有名だと話している。津山市の「ホルモンうどん」を皮切りに、真庭市の蒜山（ひるぜん）の「ひるぜん焼きそば」はゴールドグランプリに輝いた。

私は一昨年、津山市内の料理屋でホルモンうどんを食べたことを思い出した。しかしその時はそのことは知らなかった。知っていれば味わいも少し変わっただろう。料理を楽しむということそういうものかもしれない。その料理や食材の由来背景などを知ると味わいも変わる。それは旅にも言えることで、訪れた場所の歴史などを知るだけでも旅の感動が異なるというものだ。

その津山を過ぎて、バスは北上して鳥取県との県境に向かっている。そしてこの地方で有名な大山が見えてくる。大山は台形型をしており、そそり立つ壁のようにも見える。

■とっとり花回廊

バスは鳥取県に入り、溝口 IC で高速道路を降りる。すると今まで台形に見えていた大山が、富士山型に変わっている。これもバスガイドが教えてくれる。大山は横に長い頂上を持っていることが容易に想像でできる。

バスは鳥取県立「とっとり花回廊」にやって来る。私も妻も初めての訪問で、最初は単なる花がたくさんある公園だと思っていたが、この公園はその見せ方が実に上手に工夫されていることに感動する。

最も特徴的なことは“花回廊”という名前が示すように花を見るための回廊が用意されていることだ。回廊は一周約 1km、つまり直径約 300m の大きな輪の通路で、通路の幅は 5m くらいで屋根が付いている。屋根付きの通路は地上数mの高さにあって宙に浮いているように感じられる。実際には宙には浮いていないが、橋脚で支えられていて回廊を歩いている人には橋脚は見えないので、そう感じられる。この回廊を歩いて行けば咲く花のほとんどを眼下に見渡せるようになっている。



【回廊の上から中央のドーム】



【回廊から花畑を見る】

回廊だけを歩いても十分に満足できるが、回廊の東西南北の各要所にはシアター・展望室、売店・レストラン、ジャングルドーム、ユリの館などある。それら 4 つの要所から回廊の中心に向かって通路が延びており、その中心には直径 50m 高さ 21m の大きなドームがある。ドームの中は温室になっており、椰子の木や蘭の花が咲いている。各種イベントもできるようになっていて、本日は“メダカすくい”大会が開催されている。

回廊を歩かなくても園内にはフラワートレインと呼ばれる汽車の形をしたバスも走っているので、小さな子供や高齢者はそれに乗って巡ることもできる。

この施設は本当に素晴らしい。そう感じるのには全く期待していなかったのが良かったからだが、そもそも知らないのだから当たり前の話だろう。これも偶然と感動で、ミステリーツアーの効能と言っていいたいだろう。

私は過去何回かミステリーツアーに参加しているが、有名な場所を避けて穴場を巡ることが多い。私も含め国内各地を歩き尽くしたと思っている旅行者にとって、ミステリーツアーは意外な場所に連れて行ってくれる。どんな旅行好きでも、たとえ旅行業界の人でも日本を全て巡った人など誰もいない。



【中央のドームの内部】

■鳥取あれこれ

バスガイドの話では鳥取県は日本一人口の少ない県で 55 万人しかいない。その次は島根県、高知県、徳島県と続くが、どれも中四国地方の県だ。そのことを彼女は危惧している。

嬉しいニュースもあって、その鳥取県から高知県まで 300km が高速道路で繋がって、日本海、瀬戸内海、太平洋が 3 時間で行けると言う。私も走破してみようかという気持ちになる。

さらに彼女は鳥取には海女がいると言う。現在 10 人程いて平均年齢は 70 才というから絶滅危惧種だとも言っている。鳥取の海女は 400 年の歴史があって、豊臣秀吉の朝鮮出兵で朝鮮から戻った兵士がここに流れ着き、その中に志摩半島の出身者がいて海女という職業を広めたという。

そんな歴史を知っただけでも、地方文化に触れて旅の味わいが変わってくる。

鳥取市に入り、気高町の浜村温泉を通り過ぎる頃、ここは貝殻節で有名だとバスガイドが言っている。貝殻節はこの地域の民謡だが、海岸で働く漁民の労働歌のようなものだという。

そして「貝殻節って、どんな歌か知っていますか？」と聞いてくる。乗客たちの反応を見ながらまた聞いてくるので、乗客たちは歌ってくれとばかりに拍手が始まり、そしてそれが手拍子に変わる。その雰囲気盛り上がるのを待って、彼女は貝殻節を歌い始める。いかにもバスガイドという節回しで綺麗な声で歌ってくれる。伴奏もなく、歌詞も全て覚えているから凄いとしか言いようもない。そして歌い終わって手拍子は大きな拍手に変わった。

ツアー客の中でこの歌を知っている人はそんなに多くなかったようだが、実は私は貝殻節を知っていた。それは私の好きなフォークグループ「五つの赤い風船」が歌っていたからで、このグループはあの名曲「遠い世界に」で有名だ。そんなこともあって実に懐かしく聞いてしまった。

■因幡の白兔（うさぎ）

バスは日本海沿岸を東に移動し、短いトンネルを抜けて小さな島がある。バスガイドはこの島が因幡の白兔伝説の島だと教えてくれる。道沿いに白兔神社、海岸は白兔海岸という標識もある。

バスガイドは因幡の白兔の話始める。登場する神様は大黒様、つまり大国主（おおくにぬし）だと彼女が紹介する。私はそれを聞いて驚く。国譲り物語で天照大神に日本を譲って、あの世の主になって出雲大社に祀られた大国主が因幡の白兔の大黒様だったというのか。大黒様は七福神のメンバー、七福神の中で日本の神は恵比寿様だけのはずだ。質問しようかと思ったが話の腰を折りそうなので、今はここで留めておこう。

八十神（やそがみ）という神様の兄弟が因幡の国の八上姫（やがみひめ）に求婚するためにやってきた。毛をむしられて丸裸で泣いている兔を見た神様たちは「海水を浴びて、山の頂上で風と日光を浴びれば治る」と言い、その言葉を信じた兔は実際にやってみると痛みはひどくなる一方だった。そこに他の神様たちの荷物を全部持たされた大黒様がやってきて、泣いている兔を見て理由を聞いた。隠岐島にいた兔は、因幡の国に行きたいと考えたが、自分の力では渡ることができず、ワニザメに声をかけて「あなたたちと私たちの種族は、どちらの数が多いか数えるので、仲間を集めて並んでください」と言い、兔は横に並んだワニザメの背中の上を飛び跳ねて因幡の国に渡った。しかし最後に「お前たちは騙されたのさ」と言ってしまい、ワニザメたちは怒り、兔は毛を剥ぎ取られ丸裸にされた。そして泣いている兔を八十神たちがからかった。

この話を聞いた大黒様は、「河口に行ってお水で体を洗い、蒲の穂をつけておきなさい」と教え、兔がそのとおりにすると体の傷はたちまち癒え毛も元通りになった。感激した兔は「あなたこそが八上姫の婿になるお方です」と伝えた。その後八上姫に八十神たちが求婚をするが、八上姫は相手にせず、荷物を持って遅れてやってきた大黒様の姿を見ると「荷物を背負っているあなたの妻にしてください」と言い、兔が言ったとおりに2人は結ばれた。

私が知っていたのはこの話の前半までで、後半の八上姫と結ばれることまで知らなかった。ひとつ勉強になった。それにしても大黒様が大黒様とは、ひとつ宿題が増えた。

■鳥取砂丘

バスは鳥取市内を走りぬけ、標識がたくさん出ているので、次の観光と昼食は鳥取砂丘だと教えてくれる。砂丘会館と書かれた建物の前の駐車場にバスが停まり、まずは昼食になる。

食事の内容はエビ、イカの刺身、そして鳥取牛を焼く半透明の石のような板がコンロの上に乗っている。私はこの半透明の板が何か分からなかったが、店の人が岩塩板だと教えてくれる。この岩塩板の上で焼かれた鳥取牛は適度に塩味が効いて、実に美味しい。なかなかの演出で乗客たちは皆驚き感激している。隣に座った夫婦はこの岩塩板を持って帰りたいとまで言っている。



【岩塩板と鳥取牛】

鳥取砂丘は私にとっては 2 回目の訪問で、大学生の時の日本一周旅行で立ち寄って以来なので実に 46 年ぶりになる。

「馬の背」と呼ばれる砂の山が、道路から海岸に行く途中に立ちはだかつており、そこに登らないと海は見えない。46 年前はこんなに高くなかったような気がする。当時の私は鳥取砂丘とは大きな砂漠だと思い込んでいて、単なる砂の山を見て落胆したことを思い出した。

46 年も経過して私の見る目も変わってきた。海外の本物の砂漠を見て、日本各地の海岸の砂浜も見てきた。鳥取砂丘は砂漠ではなく砂浜のひとつだが、小高い山になっているので砂丘と呼ばれている。ではなぜ鳥取砂丘が名所になっているのかと言えば、千代川によって運ばれた大量の砂が日本海から吹き上げる風によって押し上げられて馬の背と呼ばれる砂の丘になった。日本海の自然が生んだ反り立つ丘は、ひょっとしたら 46 年前よりも高くなっているのかもしれない。



【鳥取砂丘の馬の背】

それにしても私は今回のツアーで鳥取砂丘に来ることなど全く想像もしていなかった。その上、妻は初めての鳥取砂丘ということで、えらく感激している。まさしく、偶然と感激だろう。

■湯村温泉

バスは兵庫県に入り、新温泉町の湯村温泉「朝野家」に到着する。驚くべきことはホテルの建物の 4 階の壁から温泉の滝が勢いよく流れ落ちている。これは初めて訪れるお客には相当にインパクトがある。さすが 5 つ星の宿だと感動する。

5 つ星の宿とは、観光経済新聞社が年間 230 軒ほどの宿を独自の基準で認定しており、毎年認定される宿が多いので累計で全国に 380 軒くらい 5 つ星の宿が存在している。日本の温泉宿の総数は約 1 万 3 千軒なので、34 軒に 1 軒の割合で 5 つ星の宿があることになるが、貧乏旅行の多い私はそんなに多く泊まっていない。さすがにクリスタルハートの旅は違う。



【朝野家の滝】

部屋に入ると 5 つ星をより感じるようになる。窓際に小さな化粧部屋があり、部屋の壁が木の塀をイメージしてあって実にいい感じがする。仲居さんが入れてくれたお茶を飲んで、ホテル主催の温泉街ツアーがあるのでそれに参加する。

ホテル出発前に生卵を渡される。ホテルを出て 5 分くらい歩くと、温泉街の中心地の荒湯という場所に出る。そこには 98℃の湯が湧き出ているので、湯に生卵を入れると約 10 分で茹玉子にすることができる。昔ここは住民の炊事場になっていたようで、隣の川で山菜などの食材を洗い、温泉でそれらを茹でていた写真が残っている。今は観光客が茹玉子を作る専用施設になっているが、山菜などを茹でる大きな釜もある。



【新湯】

この温泉街は吉永小百合主演の NHK のドラマ「夢千代日記」のロケ地だったということで、吉永小百合の銅像と手形がある。銅像の前で記念写真を撮って、手形に自分の手を重ね合わせる人がほとんどで、手形は吉永小百合だけでなく他の人のものもあるが、吉永小百合の手形だけが誰もが触るので金色に光っている。

それにしても NHK がドラマ化しただけで 35 年以上経っても皆が写真を撮り盛り上がるのだから感心してしまう。それならば全国の観光地では桃太郎や金太郎の伝説を使わない手は無い。

宿に戻り大浴場に行く。大浴場はとにかく“凄い！”の一言に尽きるだろう。

内風呂は広く綺麗にできている。露天風呂には石垣があってその石垣から湯が流れ出ている。そのため城の中で温泉に浸かっているような気持ちになる。露天風呂の隣には大きな石をくり抜いた石風呂があって少し温めの湯になっている。私はこの石風呂が気に入って、いささか長湯をしてしまった。その他に露天風呂の隣の石垣の地下に低温サウナ室がある。豊富で高温の温泉がなせる業だろう。



【大浴場の露天風呂 右奥の階段上に石風呂】

夕食会場に行くと、金屏風の前に大きな生け花が活けられており、お客たちの注目を集めている。さらに各テーブルにも生け花が活けられている。

料理はとにかく豪華だ。前菜だけでも豪華なものがたくさん出てくる。しかも豪華だけでなく細部にこだわりが感じられる。この季節を意識してカエルとホタルもでてくる。もちろん食材を加工したもので、カエルは胡瓜を彫ったものだが、ホタルは食べても何で出来ているか分からなかった。

女将が挨拶に現れた。挨拶の中で、部屋の風呂も洗面所も全館の冷暖房も全てが温泉を利用したもので、ボイラーは一切使っていないという。天井の装飾は奈良唐招提寺の宮大工が手掛けたもので、生け花は全て自分がいけて、料理に添えられている俳句と絵は彼女の夫、つまり社長の作だと言っている。何やかんやと自慢話を綺麗な口調でしゃべっているが、あまりイヤミに聞こえないのは彼女の気品と素朴さのせいかもしれない。



【前菜 左下がホタル、右下がカエル】

女将の挨拶が終わる頃、但馬牛のしゃぶしゃぶが食べ頃になっており、これを食す。実に柔らかくて美味しい。

最後に3段箱のデザートが登場する。温泉で7時間煮込んだ生キャラメル、自家製プリン、果物が3段に分かれて箱に入っているという趣向をこらしたものだが、私の胃袋はもう限界に近づいている。

朝食には兜（カブト）の鍋が出てきた。正確に言うと固形燃料で温める鍋の蓋がカブトの形をしている。実に洒落た演出で、中にはワカメとエテカレイが焼かれている。このワカメの塩加減が絶妙で美味い。その他にも、鯛みそ、白イカの刺身もいい味になっている。もう一つ固形燃料の鍋があって、こちらは豆腐づくりの鍋で、燃料が終わる頃に鍋の中に豆腐が出来上がるという趣向だ。これだけの朝食なので、他の宿では夕食といっても差し支えないだろう。



【朝食 左上に兜の蓋の鍋、右上に豆腐の鍋】

宿を出発する時、いつものことではあるがバスの見送り風景になる。ところが今までの他の温泉宿では経験したことのない程の盛大な見送りで、バスの乗客は皆驚いている。

第三章 ミステリーツアー3日目

■兵庫県北部

宿を出てバスは約30分走って余部鉄橋にやってくる。

高さ41mの余部鉄橋は鉄道ファンには有名だったが、ある事故によってさらに有名になった。それは1986年12月28日強風のため鉄橋から列車が転落し、乗っていた乗務員1人と鉄橋の下のカニ工場で働いていた5人が死亡した。

日本海の風はやはりすさまじい。列車さえも転落させるほどの威力がある。鳥取砂丘を造っただけのことはある。そしてこの事故を機に鉄橋が廃止され、現在はコンクリート製の橋になっている。それでも鉄橋の一部は残されて観光名所になっている。転んでもただでは起きないということか。

バスが出ようとする時、旅館の人がまた、見送りの手を振っている。誰かが部屋に忘れ物をしたとのことで、それを届けに旅館の人がここまで来てくれたので、ここで再度の見送りになった。

兵庫県豊岡市はコウノトリが有名だとバスガイドが説明すると、車窓からのコウノトリ探しが始まる。コウノトリと間違いやすいのがサギで、コウノトリに比べてやや小さく全身が白い。車内で「またサギ、またサギだった」とサギと詐欺が混在しているかのようだ。

〇〇蕎麦で有名というヒントが行程表にある。添乗員は蕎麦にはアレルギーがあるので事前情報を入れておく必要があったのではないかと吐露している。

出石（いずし）の街に到着する。出石蕎麦で有名な街というが、私は出石の街も蕎麦も知らなかった。江戸時代の国替えで信州から人が移住して西日本では珍しい蕎麦処になったという。

出石の街を散策してから昼食になる。街並みは最近よく見かける古い街並みを保存したもので街の中心にある辰鼓桜という櫓が名物らしく多くの人が写真を撮っている。街の近くの有子（ありこ）城は山城で現在は城跡となっているが、標高 321m の頂上に城があったという。この山城は初日に見た鬼ノ城に似ている。時間があれば登ってみたい気持ちになる。

「出石城山ガーデン」で昼食になる。もちろん出石蕎麦が出てくる。小さな皿に盛られた蕎麦が3枚と雑穀米や小鉢が付いている。味の方は、私には可もなく不可もないといったところだ。



【出石の街並み 辰鼓桜の背後に有子城のある山】

出石から近い「カバンのたなか」という鞆の工場兼販売所に立ち寄る。この辺りは鞆の産地で、妻が鞆を3つ買った。良い買い物をしたと喜んでいる。

そこからバスに乗ること10分程で「玄武洞」に到着する。ここは柱状節理が地表に現れたもので洞穴ではないが、柱状節理の石を地元民が勝手に持って行ったので削られて穴ができたのでそう呼ばれているという。この玄武洞の柱状節理の特徴は、真っ直ぐ上に伸びているだけでなく褶曲しているのが珍しい。結構凄いのにあまり観光地化されていない。

■浦島太郎伝説

今回のミステリーツアーのパンフレットで城崎（きのさき）温泉の写真が載っていたので、私ははっきり城崎温泉に泊まるのかと思っていたが、バスは城崎温泉を素通りして、その先にある日和山温泉にやって来た。

沖合には竜宮城の島がある。小さな無人島に竜宮城のミニチュアを作ったもので、この写真もパンフレットにあったが、私には検討もつかなかった。



【無人島のミニチュア竜宮城】

竜宮城とくれば浦島太郎だ。しかし浦島太郎伝説は全国にあつて、あまり特定できていない。

相模国三浦、つまり今の神奈川県の上三浦半島に浦島太夫という人がいた。その息子の太郎は、浜辺で子供たちにいじめられている亀を助け、竜宮城に招待される。玉手箱と観音像をもらって戻るが、既に両親は亡くなっており、墓は武蔵国にあるというので、老人になった太郎はその観音像を墓の近くに安置した。その時の観音像が横浜市の運慶寺に安置されている。

香川県三豊市も三浦とほぼ同じ内容で、亀を助けた浜辺、太郎親子の墓などがある。

沖縄県にもあるが、玉手箱でなく紙包みで、その紙包みの中にある白髪がついて老化し亡くなってしまったという話になっている。

以上の3つは単なる伝承で記録に残っていない、いわば先に言ったもの勝ちの世界だ。

しかし記録に残っている最古のものは丹後国の風土記で、水江浦島子（みづのえのうらしまこ）の話として残っている。どうやらこれが浦島太郎伝説の元になったらしい。浦島子は女性が惚れる要素がそろった男性で、彼が釣りをしていたら美しい女性と出会った。そして一緒に別の国に行った。再び戻ったところ、既に何年もの月日が経っていたという話になっている。

どの話も共通点は、時間の経過で白髪の老人になり、遊興に興じていると時間だけが経過して人生の徳にならないことを言いたかったのかもしれない。

尚、丹後の国とは京都府北部のことで、この日和山温泉は丹後と但馬の境界付近で微妙な位置にあるが、まあ先に言ったもの勝ちで、ミニチュアでも作ってしまえば、そこが竜宮城の名所になるというものだろう。

■日和山温泉

日和山（ひよりやま）温泉の「金波桜」に着いた。宿の目の前は海、正面には先ほどバスから見えた竜宮城の島がある。眼下には城崎マリンワールドという施設がある。ここで城崎を名乗っているのだから、この一帯は広い意味では城崎温泉と言ってもいいのかもしれない。宿のバスで城崎温泉の外湯巡りに連れて行ってくれるので、ツアーのパンフレットにあった写真もあながち間違いでもないのかもしれない。

このホテルも 5 つ星の宿に 2021 年認定され、全室オーシャンビューになっている。天井が高いロビーからの眺めがよく、無料のウェルカムドリンクもここで飲むことができる。

部屋に入るとにかく広い。15 畳の主寝室に広接セットが置かれた 6 畳の広縁、その他に 4 畳の次の間や、5 畳の奥の間まである。私が今まで泊まった部屋の中で一番広いと言っていいだろう。

大浴場もオーシャンビューで特に露天風呂からの眺めが良く、下にあるマリンワールドのイルカショーも見える。私はその露天風呂に陣取りしばらくの間イルカショーに見入ってしまった。



【ロビー】



【大浴場 右が露天風呂】

夕食はカニ料理から始まる。近くの香住（かすみ）は松葉ガニの産地だからで、ここではズワイガニは松葉ガニと呼んでおり、これが北陸に行くと越前ガニと呼ばれる。今はカニの季節ではないので当然冷凍ものが使われている。

但馬牛と八鹿豚のつくね陶板焼きという良く分からない料理が出てくる。この料理は柔らかく、そして温かく濃厚だ。あまり食べたことがない料理だが、妻は簡単にいえばハンバーグだと言っている。確かにつくね陶板焼きは、ハンバーグを日本語表現したようなものだ。それも但馬牛と八鹿豚なので合い挽き肉になる。ハンバーグはドイツの港湾都市ハンブルグ発祥の料理だが、それを全く知らずに日本でこれが生み出されたとすれば、日本民族はたいしたものだ。

夕食後は、部屋で食休みをして一杯やり始める。カーテンを開けて部屋の電気を消すと、竜宮城がうっすら見えて、島には白波が立っている。幻想的な光景によって、より一層酒を美味しくしてくれる。

翌日の朝、このホテルの見送りイベントが素晴らしい。バスが通る道を両側から約 5m の等間隔で従業員が並んでおり、左右それぞれ 7~8 人ずついる。手の振り方も練習しているようで見事に揃っている。それは私がこの見送り風景を旅行記に書くことを知っているかのようだ。

第四章 ミステリーツアー最終日

■姫路城

バスは南下して朝来（あさご）に入り、日本のマチュピチュと呼ばれる竹田城跡の横を通過する。その竹田城の歴史をバスガイドが詳しく話してくれる。

しかしそれは、本日これから姫路城に行くのが見え見えなので苦労して話題をそらしているとか私には思えない。行程表には本日は世界遺産の〇〇〇に行くを書いてあるからだ。この近くで3文字の世界遺産は姫路城しかない。

予想通り姫路城にやって来る。私にとって姫路城は3回目になり、前回から既に25年も経っている。その間に大修復も行われた。世界遺産検定で勉強したこの城は“守りと美”を兼ね備えていて、1993年日本で最初に世界遺産登録された4件のうち1件だ。他の3件は法隆寺、屋久島、白神山地で、いずれも日本が満を持して世界遺産に推薦した。



【姫路城】

私は講演で姫路城を紹介する時には多くを語らない。「姫路城が日本で最初に世界遺産になった城で、この城以外に世界遺産になった城はありません。そして日本には現在12城だけ昔の天守閣が残っていますが、その12城の中でピカイチです」と紹介して、「とにかく行って見て下さい」と付け加えている。

修学旅行の生徒たちが集合写真を撮っている。生徒にどこから来たかを聞こうとしたが、以前修学旅行生に聞いたら、「何、この怪しいおじさんは？」というような対応をされたことがあり、近くにいた引率の先生、それも若い綺麗な女の先生をわざわざ選んで聞いてみた。

彼女は快く対応してくれて、三重県から来た中学生たちで今日が初日だという。ついでにこれからどこに行くかを聞いてみたら、明日は大塚国際美術館、明後日はUSJという。私も妻もこの内容に驚き、そして感心する。世界遺産の次は世界最大の西洋美術館、そして人気のアミューズメント施設と、実に良く考えられている。

大手門を出たところの食事処があり、おでん、明石焼き、にゅう麺を注文する。

おでんはバスガイドが姫路の名物はおでんと言っていたのを思い出して注文した。明石焼きは姫路から近い明石の名物で、私が大阪に住んでいた時に好んで食べていたのでその味を思い起こして注文した。にゅう麺は奈良県大和地方の郷土料理で姫路からは遠いが、同じ関西圏なのでここでも出しているのだろう。にゅう麺とは温かいそうめんのことで煮麺が語源らしい。

味の方は、ここでは敢えて触れないことにしておこう。

■岡山に戻る

ミステリーツアー最後の訪問地は、行程表には△△△伝説で有名な○○○神社というヒントがある。バスは姫路から再び岡山県に戻って来ているから桃太郎伝説だろうとは思いますが、神社については全く分からない。そして着いたのは吉備津神社という大きな神社で、私はその名前さえも知らなかった。

急な階段を30段くらい登ると拝殿があって、参拝する。この神社は大きく由緒ある神社なので拝殿と本殿が別れており、拝殿の直ぐ後ろに本殿があり、その本殿の横に回って少し遠くから本殿を眺めると珍しい屋根を見ることができる。本殿の屋根は入母屋造りが2つ並んだ造りになっており実に珍しい。こんな造りの神社はこの神社だけだとバスガイドは言っている。確かに私も見たことがない。そのため拝殿も本殿も国宝に指定されている。



【横から見た国宝の吉備津神社の本線と拝殿 拝殿（右）と本殿（左）】

この神社は第7代孝霊天皇の皇子の吉備津彦を祀っている。

その昔、この一帯は吉備国と呼ばれており、現在の岡山県全域とその周辺、瀬戸内海、四国の一部も含む広範囲の地域で、大和、筑紫、出雲と並ぶ古代日本の四大王国だった。いわば当時の政権にとっては最重要地域で、そこを温羅（うら）一族が支配していた。そしてこの一族が住民を苦しめているとうことで、都から派遣された吉備津彦が苦戦の末にこの一族を滅ぼした。

当然のように勝てば官軍、歴史は勝者によって創られるので、吉備津彦は正義のヒーローになり、温羅一族は悪者扱いされ鬼にされた。これが桃太郎伝説になったと言われている。その闘いにまつわる言い伝えなどが境内のあちらこちらにあり、初日私たちが行った鬼ノ城は温羅一族の城だと書かれている。

しかしこれは理解できない。あの城は白村江の戦いの後に出来たので第38代天智天皇の時代だ。どう考えて第7代と第38代とではあまりに時代が離れている。

この神社には見事な回廊があるとバスガイドが案内してくれる。本殿からの帰りは階段を降りずになだらかな回廊を進む。回廊は横から見ると見事な眺めになっている。



【回廊】

回廊を歩いて駐車場に戻ると犬養毅の銅像がある。犬養は岡山県の出身の政治家で総理大臣も務めた。

この“犬養”という名前がキーワードだとバスガイドは言っている。桃太郎の家来になったのは犬、キジ、猿で、犬養毅は吉備津彦の家来の子孫だという。犬がいるのならばキジも猿もいるはずで、そういえば朝のNHK連続テレビ小説で岡山を舞台にした「カムカム・エブリバディ」で主人公が嫁ぐ“雉真（きじま）”という名家は、まさしく鳥のキジ（雉）の名前になっている。

バスは吉備津神社を出発して吉備の国の真ん中、つまり備中に来る。備中と言えば高松城は羽柴秀吉が水攻めした城で有名だ。城は山に囲まれた平地にあり、ここに水を流し込んで水を貯めて城を孤立させた。水を堰き止めるために高さ8m横24mの堤防を造った。その堤防の一部が今も残っている。この水攻めが最終段階になった頃に本能寺の変が起き、秀吉は慌てて和議を結び、中国大返し、そして天下を取った。

秀吉は主君の信長から“猿”と呼ばれていた。おっと、これは吉備津彦の家来とは無関係だ。

バスは岡山桃太郎空港に再び戻ってきた。そしてミステリーツアーもここで終わりになる。

バスの中ではバスガイドが別れの挨拶をしている。「旅は楽しまないと、つまらないですよ」と言っていたことが印象的だ。彼女は地域の歴史・文化だけでなく歌や芸能にも詳しい。それらを分かり易くユーモアを入れて紹介してくれた。“旅を楽しむ”ということは単に見物するだけでなく、その地域を多方面から理解することだと教えてくれた。

それゆえバスガイドの人気は高い。私にしてもこれほどのバスガイドに会った記憶がない。

第五章 ミステリーツアーを終えて

■桃太郎伝説

ミステリーツアーを終えて温羅一族を調べてみると興味深いことがわかる。温羅一族の首領は朝鮮半島の当時日本の友好国の百済の王子で、吉備へやってきて一帯を支配した。それが鬼にされるとは、一体どういうことなのか。

それを滅ぼした吉備津彦は第7代天皇の子供なのでかなり古く、むしろ日本の創成期に近い。

まず、日本の国の創成期について私の持論を紹介する。

そもそも元々日本列島に住んでいた日本人は南の島からやって来た。それは私が昔、叔父から聞いた話で、遠い南にある島では男性器のことを“チンチンポコポコ”と言っており、現在の日本の表現に似ている。この種の言葉は時代に影響されずに脈々と受け継がれるから日本人南方説は叔父の持論である。

つまり日本人のルーツは南方系で沖縄の人々のように顔のほりが深かった。しかし現在の平均的日本人は、のっぺり顔で、映画「テルマエロマエ」では“平たい顔族”と呼ばれるほどだ。つまり人種が変わった、あるいは人種が混ざった。

神話によれば元々の日本を支配していたのは大国主で、高天原から来た天照大神に日本を譲った。これが国譲り神話で、平和的に譲り受けたことになっているが実際は武力制圧だったのだろう。そして天皇家を中心した政権ができる。それが大和朝廷だ。問題はその高天原が何処かだが、それは朝鮮半島の百済で、天皇家はそこから来て日本を支配していった。そして長い年月の末に朝鮮系ののっぺり顔と南方系のほりの深い顔が混ざって現在の日本人になった。

元々の南方系日本民族は近畿地方から遠い九州南部の奄美群島や沖縄に残ったが、東は関東、東北、そして最後は北海道まで追いやられた。それがアイヌ民族で、その証拠に沖縄の人々とアイヌの人々は顔が似ている。少なくとも平たい顔族ではない。以上が私の持論になる。

大和朝廷と百済は関係が深い。538年には百済の王から仏像が贈られたのを契機に日本で仏教が始まる。そして実家から親戚縁者を呼び寄せて足場を固めていった。そのひとつが吉備の国の温羅一族だったのだろう。しかし温羅一族は大和朝廷に歯向かったか、あるいは何らかの理由により吉備津彦に滅ぼされた。

そして第38代天智天皇の時代に、朝鮮半島では百済が新羅に大敗し、実家存亡の危機に陥った。そのために白村江の戦いに日本から大軍を派遣したが、負けて逃げ帰った。それで日本も取られるのではないかと心配のあまりに鬼ノ城などの防衛の城をいくつも造った。

これは私の推測だが、立地条件が良かったので温羅一族が本拠地に使っていた山城を再建したのかもしれない。そう考えればあの鬼ノ城は桃太郎伝説の城になる。

■ミステリーツアーについて

今回のツアー「東京クリスタルハート初登場の全室オーシャンビューの5つ星の宿と当社基準Sランクホテルに泊まる につぼん再発見ミステリーツアー4日間の旅」は、その名前どおりそして私の期待どおり高級旅館に泊まった。そんな長い名前は必要ないと思うが、単に高級旅館では具体性がないのでいろいろ書いたのだろう。“につぼん再発見”は童心に帰って昔話の日本を感じることができた。

再発見という意味ではバスガイドの存在は大きかった。歴史・文化を精通して分かり易く紹介してくれるので“旅を楽しむ”ということはこういうことだと教えてくれた。

ミステリーツアーは、これはお勧めしたい。私の持論「期待と落胆、偶然と感動」では、旅は期待し過ぎてその期待が外れると落胆し、逆に期待しないで偶然に出会ったものは感動が大きいと言っている。その意味では行き当たりばったりの旅の方が“偶然と感動”を体験することができるが、そんな偶然は滅多にない。それも含めて旅だという考え方もあり、私はそれを否定しない、むしろ正しいと思うが、“偶然と感動”を意図的に演出するミステリーツアーは選択肢のひとつとしてありだろう。

さらにミステリーツアーは有名な場所を避けて穴場を巡ることが多い。国内各地を行き尽くしたと思っている旅行者にも面白いだろう。

私は今回の旅も旅行記に残そうとしているが、その名前が難しい。岡山県、鳥取県だけならば中国地方や山陽山陰地方でもいいが、近畿圏の兵庫県にも行っている。そしてその兵庫県で2泊もしている。

いろいろ考えた結果、岡山桃太郎空港から始まり、そこで終わったので、旅行記は「ミステリーツアー岡山 2022」にすることにした。

■大黒様は大国主か

大黒様は大国主なのか、という疑問についても調べてみた。

インドのヒンズー教にマハーカーラという神がいた。マハーは大きい、カーラは黒を意味しており、中国に入ったときに大黒天（だいこくてん）と訳された。つまり大黒様のことで、これが日本に入って読みを一致させて大国（たいこく）になり、元々日本にいた大国主と同一とされたようだ。つまりマハーカーラと大黒天は同じだが、大国主は違う。

しかし大国主という人物がいた訳でもなく、大黒天もしかりだ。自然物や超自然物のように人間の力が及ばない存在を神とすれば、元は別のものでも同じものだと考えれば同じになる。

日本に仏教が伝わったのは6世紀で、それまで日本は全てのものに神が宿るとされる自然崇拝が基本だった。仏教を広めようとして日本の古来の神と矛盾しないように“神仏習合”の考え方で、日本の神と外来の神をうまく合わせていった。

大黒天は他の神の荷物を全て持ってあげ、大国主は日本を譲ってくれと頼まれれば譲るのだから、どちらも包容力のある存在で、イメージは一致させやすい。そのために同一の神になったらいい。

■温泉評価委員会

私は温泉宿を評価する温泉評価委員会、通称「おひょい」を立ち上げている。それは温泉宿に泊まった時に組織される勝手気ままな委員会で、委員は同行した人になる。

評価の基準は、5は驚き感動、4は普通に良い、3は可もなく不可もない、2は普通に悪い、そして1は失望落胆としている。

尚、今回はツアーなので直接宿に支払いをしていないので、HPで調べた宿泊費でコスパは評価した。

湯郷温泉「美春閣」は泉質 4、風呂 4、料理 4.5、コスパ 4、サービス 4.5、建物・部屋 4、立地環境 3.5、総合点 4.07 になった。

湧出温度 38.9℃、pH 未掲載、泉質はナトリウム・カルシウム・塩化物泉（低張性弱アルカリ泉）

湯村温泉「朝野家」は泉質 4.5、風呂 5、料理 5、コスパ 3.5、サービス 3.5、建物・部屋 5、立地環境 4、総合点 4.36 になった。泉質が高い理由は泉質そのものよりも潤沢な湯量を評価した。

湧出温度 98.4℃、pH 7.52、湧出量 483L/min、泉質はナトリウム・炭酸水素・塩化物・硫酸塩泉（低張性弱アルカリ高温泉）

日和山温泉「金波桜」は泉質 4、風呂 4.5、料理 3.5、コスパ 4、サービス 4、建物・部屋 5、立地環境 5、総合点 4.29 になった。

湧出温度 21.3℃、pH 7.13、湧出量 34L/min、泉質はナトリウム・カルシウム・塩化物泉（等張性中性冷鉱泉）

■旅の記録

旅行は 2022 年 6 月 10 日（金）～6 月 13 日（月）の 3 泊 4 日で実施、行程を以下に記す。

- ・ 1 日目 7 時 25 分に羽田空港集合、9 時 30 分岡山桃太郎空港着、以降観光バスで移動
倉敷美観地区散策と寿司和食「しば田」で昼食、岡山県総社市の鬼ノ城跡を観光、
16 時に湯郷温泉「美春閣」にチェックイン
- ・ 2 日目 9 時宿を出発、鳥取県南部町の県立「とっとり花回廊」見学、
13 時 30 分鳥取砂丘会館で昼食、鳥取砂丘散策
15 時 30 分兵庫県の湯村温泉「朝野家」にチェックイン
- ・ 3 日目 9 時 10 分宿を出発、兵庫県香美町の余部鉄橋に立ち寄り、
兵庫県豊岡市の出石城下町を散策、同じく「城山ガーデン」で昼食
豊岡市の玄武洞公園見学、15 時豊岡市の日和山温泉「金波桜」チェックイン、
- ・ 4 日目 9 時宿を出発、11 時 30 分姫路城見学、姫路城近くで自由昼食、
16 時に岡山市の吉備津神社参拝、17 時 15 分岡山桃太郎空港到着
18 時 55 分岡山桃太郎空港離陸、羽田空港 20 時 10 分着陸、22 時帰宅

費用は 1 人当たり約 10 万 6 千円、内訳を以下に示す。

- ・ 阪急交通社に払い込み 200000 円 (2 人分)

ツアーの正式名称「東京クリスタルハート初登場の全室オーシャンビューの5つ星の宿と当社基準Sランクホテルに泊まる につぼん再発見ミステリーツアー4日間の旅」

- ・ 昼食 2 回分 約 6000 円 (倉敷と姫路城の昼食、2 人分)
- ・ その他 約 6000 円 (飲み物代、土産物、羽田空港までの交通費など、2 人分)